

## 『伝えるということ』

2007/04/08

seren arbazard

1Δ ぬ ヴ

ㄥ ヴ

2006/12/19

アトラスで悪魔シェルテスを倒した私たちは神々の祝福を受け、無事地球へと帰ってきた。一緒に戦ったアルシェやハインさんとはアトラスで別れた。アトラスを救った褒美として、悪魔メルティアが 1 つだけ時間を操って願いを叶えてやると言い、アルシェは自分の母に会いに行ったからだ。

レインはというと、本当は亡くなったお父さんに会いたかったのだろうが、会うと帰りがたくなると思って止めたそうだ。もし過去に行ってお父さんを助ければ、私には会えなかったことになる。それが嫌なのだと。

お父さんが亡くなったのを彼女は決して肯定していない。ただ、起こってしまったことは受け入れるという姿勢なのだろう——と言ってしまえばきれいに聞こえるが、実際は親友と父のどちらかを選ばなければならない状況に身を置きたくなかったのだろう。

結局レインは私たちと地球に来た。この星で何かやり残したことがあるみたい。何だかは分からないけれど。

今、私は先生とレインと 3 人で自分の部屋にいる。お父さんとお母さんにはもう会って、ただいまの報告をした。娘の冒険活劇を 2 人とも飽きもせず聞いてくれた。お父さんはいつもおどおど黙っているだけだったけど。

さて、そろそろレインともお別れなのかしら。そうになるとまた来年かあ、寂しいなあ。静を見ると、レインを見つめて何か言い出そうとしていた。同じことを考えてるのね、きっと。

静が口を開こうとしたとき、中空が光って、光の中からメルティアが現れた。いつものことだからもう慣れたわ。

メルティアが私に願い事を聞いてくる。私の願いは決まっている。それを告げるとメルティアは少し意外そうな顔をした。

私は静と 2 人でアトラスに行きたい。毎年のアトラス旅行を静と 2 人で。そして、レインとアルシェを囲んで 4 人でいつまでも楽しくしていきたい。織姫と彦星のような儂い時間しか共有できないけど、それでも 4 人で過ごしたい。

メルティアが以前約束してくれたのは私のアトラス行きであって、静は数に入っていない。だから私はそこに静を加えてもらった。それが私の願い。

「それでいいのか？自分の願いは？」

意外そうな静の声。私はにこりとして答えた。

「私の願いですよ。先生と一緒にアトラスに新婚旅行しに行くのが」

すると静は少し照れたように笑った。ああ、私の愛しい人。その笑顔のなんと美しい。

次は静が願いを言う番だ。だけど静は気まずそうに黙ってケータイを見ている。どうしたんだろう。思いつかないのかな。

「紫苑、俺には難しいから、訳を頼む。なあ、メルティア……だったら俺を 1 年前の今日に戻してくれないか。こっちの暦で。場所は俺の部屋。時刻は深夜 3 時ごろで頼む」

私は訳そうとして途中で言葉を止めた。

「ねえ、なんで今日なんですか？」

静は黙っている。

「去年の今日、何があったんですか」

「……訳してくれ」

黙って押し通そうとする静。私は直感した。

そうか、それで今朝起きたとき、先生は私の手を握って枕元でずっと私を見下ろしていたんだ。

そう……あれは、私が逃げないために。私という存在が夢のようにいなくなってしまうないように。先生はシェルテスとの決戦の朝、シェルテスなんか恐れていなかったのね。あなたは、また裏切られることを恐れていた……。

「……蛍さんが、出て行った日？」

確信を持ちながらもおずおずと聞く私に静は何も答えなかった。その瞬間、不安がこみ上げた。

「ダメ！」ガバッと抱きついた「訳しません。そんなの訳しませんから！」

「どうして？」

「先生……」静の顔を見上げる「だってそしたら先生帰ってこないから」

「そんなことないよ。俺と蛍はいつ切れてもおかしくない状態だった。あまりに性格が合わなさすぎるんだ。実は俺は何度か離婚してくれと言っていたんだよ。役所に離婚届を取りにいこうとしたこともあった。だけどあいつが急にいなくなったのは誤算でね。それだけならいいんだが、その後一切連絡をよこさないとは思わなかった。今日でちょうど 1 年だ。仕事をして紫苑と会ってアトラスへ行って……激動の 1 年だったよ。でもな、未だに気持ちに整理がつかないんだ。弁護士を通して間接的に互いの真意も知らぬまま別れてしまい、子供とも会えずじまいだ。俺はね、過去に戻ったら蛍に別れ話をこちらから持ち掛けたいんだ、正式にね」

「……うそ」消え入るような声。

「え、なに？」

「嘘です……それ、嘘です。先生、帰ってこない。帰ってこないわ」

「来るさ。今、新婚旅行の話をしたばかりだろ」

首を振る私。

「今のこの瞬間の先生の気持ちなら信じられる。でも、帰ってくるっていうのは嘘。向こうに行けば気持ちが変わるわ。いまは先生、蛍さんの裏切りに怒ってる。でも、発作的に出て行った蛍さんは先生のことが嫌いじゃなかった」

「嫌いじゃないのに出てくのかよ？ありえないだろ」

「蛍さんは通帳や印鑑なんかを持って出て行ったんですよ。女として思うんですけど、妊婦で荷物が持てなかったにしても鞆ひとつ程度の荷物は少なすぎです。一緒に結婚してたなら、最低限のものでももっと量が多くなる。計画的なら気付かれないように少しずつ実家に送るなり持っていきなりしていたはずだわ。蛍さんは他に何を持っていったんですか。先生との思い出の品は一切持っていかなかったんですか？」

静は一瞬驚いたような顔で止まった。そして少し苦しそうな顔をしたが、すぐにとりなした。私は目をそらさず静を見つめていた。

「持ってったよ。貧乏院生だったころに買ってやった安物の結婚指輪と、大学するとき……結婚しようって言って池のほとりで挿してやったべっこうの髪飾りを。一銭の価値もない……愛情だけの品物だった」

胸痛がした。この痛み、静も今感じたのだろうか。

「それを持ってった蛍さんは出て行ったときは貴方を心底嫌っていたとは思えません。お互いに憎悪が湧いてきたのは別居して呪縛が解けてからで、周りの人間にあれやこれやと言われて増幅していったんでしょう？先生も彼女も同じだわ。いまの先生は蛍さんが嫌い。いまの蛍さんも先生が嫌い。でもね……何度も夢で見たんじゃないですか。蛍さんとやり直す夢」

「そんなことないよ」

「ありますよ……寝言で呼んでたわ。横に寝ていた私がそれを聞いてどんな気持ちだったと思いますか？私を抱いたすぐ後で先生は奥さんの名前を……」

ついに私は泣き出してしまった。静は一瞬絶句した。

「まあ……確かにそんな身勝手な見たくもない悪夢は何度となく見た。寄りを戻したいという意味ではない。ただあまりにもあいつが当たり前の存在だったから、夢の中では相変わらず情報が更新されずにあいつと生活してただけなんだ。気持ちに整理がついてないからこういうことが起きるんだ。だから気持ちを整理しにいくんだよ」

「じゃあ先生が蛍さんのところに行くとします」

「紫苑」私の言葉を遮る声。その声を発したのは……。

「レイン……？」

私はふっと振り返る。いま、何だか彼女が日本語の発音で私の名前を呼んだからびくっとした。

「紫苑、静……」レインはゆっくり私たちに近付いてきた。私たちの間に立つと、右手で私の左肩を、左手で静の右肩を押さえた。

⑥-Λ ʔaɾcʌ ʌe -l ʌcʌɔɔɔ ㊦

⑥ʏ-....h-h-ɔ, ʌɔɔ ㊦

⑥cl <ɔΛ, -Λ eʌɾcʌ eʌ hɔʌ-lʌ la- lɔVɾ- ʌcZʌ-, la- ʌcʌɾ-Λ ʌcZʌ- c> la lɔVɾc ʌcZʌ- eʏɔ  
ɔ ʌee, -Λ ʌcʌɾe ʌa,, hɜɪɪɪ, ec ʌcɔΛ ʔaɾ- eʌ ʌe-, ʌcZʌ-, ʌ-Λ, la- ʌc-lɾ- ->-leʌ ɔʌe  
Λ ʌc㊦

⑥lecΛ....eʌ ʌc lɔʌɾcʌ ec -Λ ʔaɾ- ʌcl -Λ ʌɔɾ- ʌɔΛ ʌchoʌʏɔ....ɔ ㊦

私は目を細めた。……どうということ？ 静を見ると、静は半分分かったような顔だけど、半分は分からないようで、助け舟を求めてきた。

「あの……レインもね、私と同じ意見だって。蛍さんは出てったときに先生との思い出を愛していたはずだって」

「分かってる。ありがとう、紫苑」

「え……？」思わず首を傾げる。なんで先生まで。どうなってるの、いつの間に 2 人とも相手の言葉が……。

⑥ʌcZʌ-, ʌc ɔʌɾc la- leɪɾ- ʌc ʌ-l -Λ ʌcʌɾe ʌa,, la -cʌ <ɔɔΛ -l ʌc, ʌee, >ɔʌ- -l ʌc㊦

「けどあいつは俺を裏切った。その上、無視して何も言ってこない。子供も勝手に産んで、何も知らせない。そんな勝手が許されるのか。あいつは戸惑っている俺を見て笑ってやがったんだ」

⑥ʌcɔΛ, ʌɔ>-lɔa eʌ ʌɔɔ ㊦

⑥えっ……あ、あの、そうね……ʌɔ>-lɔa eʌʌɾe "lɔZʌɾe ɔʌ"....--, lɔʌɔ ㊦

⑥ʏ-, ʌeeʌe,, h-c, ʌcZʌ-, -Λ ɔʌɾc ʌc cʌ ʌec,, ʌc lɔʌɾa hɔʌ-lʌ la- ʌcl la -ʌ >-l e ʌc,,  
ʌcʌʌ, -Λ lɔʌɾel la -ʌc ʏe >-Λ -Λ eʌ ʌcʌ ʏe -l la,, ɜ>....-Λ cʌʌɾ- ʏa -lʌeʌ c> >c<c-Λ >  
-Λ l-e e -Λ cʌ ʌ-ʏ, <-ʌ cʌɾe eʌʌʌʌ-ɔ,, -Λ -ʌ cʌʌ -l el-ʌ, ʔaɾ- ʌ-c ʌc,, h-dʌ -ʌ >-  
cʌʌ-Λ, ʌc-ʌɾ- -Λ,, -Λ....Λ-ɾ- lɔʌ....ʌcʌʌ-....㊦

私は静を見た。静は頷いている。いつの間にアルカが分かるようになったの？ 私がルーキーテを撃ってから何か 2 人の様子が違う。それに、どうして静はレインの日本語力に疑問を抱かないの？ あのとき何があったの？

⑥ɜ>....c> ʌel ʌe, ʌɔ -ʌɾɾ- -Λ leʌ ʌɔ>,, c> -Λ ʌe<ɾ- ɔʌeʌ- -l la, la <eeɪ- ʌa ʌɔʌʌ ʌ-  
ʌɾɾc ⑥Oec, eʌʌɾɔʌ ɔʌeʌ- e -Λ, ʌc, ʏeeɪʌ ㊦ hɜɪɪ -ʌ -ʌ ʏeeɪ ʌeʌ, -ʌc ʌeeʌ lɔʌʌ ʌeʌ,,  
c> ʌel ʌa, ʌc ʌel, -Λ ʔaɾ- ʌa -l ɔ-ɔ-, ʌɔΛ l- ʌc-ʌɾ- -l -Λ ʌ-ʌ ʌ-ʌ,, ʌc ʌel ʌa, leʌ  
-Λ cʌʌɾ- ʏa >e ʌ-ʌ leʌel,, ʌ-l -Λ ʌaɾel- a,, -lʌeʌ ʌeeɪɾ- >c -Λ,, ʌɔʌ, l-ʌɔ lɔʌɾ- -ʌʌ  
S-> e -Λ, ʌcʌɾ-ɔʌ laʌ, leʌɾ- ʌc-, hɔʌɾ-ɔʌ ʌ-ʌc e la<c,, -Λ eʌ-ɾ- ʌcʌ, ʌ-ʌcɾ- ⑥ʌeeʌ ʌ  
clʌ ㊦ ʌ-l ʌa -ʌ ʌc<c ʌcʌ ɜɜʌ㊦

「うん……」 静は口に手を当てて頷いている。

⑥c> ʌel ʌe, -Λ ʌeeɪ- -l ɔ-ɔ- ɔʌ l-lɾ-l -Λ,, ʌɔΛ la ʌeeɪ- <elʌ-, ʌɔʌɾ- ʌ-ʌ-Λ ʌcʌɾc -l



私は静の頬を両手で押さえると、ちょこんと背伸びをして、首を少し右に傾けながら唇にキスをした。舌で唇をぺろっと舐めたら静は少しびくっとした。唇を少し離すと、私は吐息を漏らした。彼の鼻腔をくすぐる私の吐息。私を抱く静の腕に力が籠る。

「帰ってきてね。待ってますから。これが最後のキスじゃ名残惜しいもん」

静は無言で頷いた。私がメルティアに願いを訳すと、静は光の中へ消えていった。

2005/12/19

光の中を歩いて目を開いたら、そこは闇だった。だが、それが単なる闇でないことはすぐに分かった。たとえ目が見えなからうが、匂いで分かる。ここは、俺の部屋だ。不思議なもので、俺はまず始めに嗅覚で1年の時が戻ったことを知覚した。

一瞬、胸が詰まるかと思った。それは、俺の部屋に混じった蛍の匂いだった。蛍がいた俺の部屋の匂い。この1年すっかり失われた、紫苑とは異なる清潔な和風の香り。もはや懐かしいときえ感じるこの匂い。また味わえるとは思えなかった。

いる。

そう、いるんだ、この闇の中に、蛍が。

俺は手を伸ばした。すると、すぐ側に求めていたものがあつた。この1年、逃げられてからというもの、一切触れることさえ適わなかった肢体がそこにあつた。

目が慣れてきた。薄闇の中、見えたのはすっかり顔を忘れかけてしまった蛍だった。生活臭というのだろうか、蛍はマスクを着けて苦しそうな寝顔で寝ていた。そうだ、思い出した。確かこのころ蛍はつわりの上、風邪を引き気味だったんだ。つい何日か前まで葛根湯を医者処方されていたっけ。

何だか感慨深くて、ふ……っと鼻息が漏れた。ああ、そうだそうだ、こいつが蛍だ。こんな顔をしていた。そう、こんな身体をしていた。こんな髪をしていた。

「……ほたる」

俺は声を出したが、名前を呼ぶのにずいぶん躊躇したせいで、掠れてしまった。

「ほたる」

もう一度呼んでみる。今度は声が出た。だが、蛍は目を開けない。俺は緊張していた。ゆっくりと手を伸ばす。もはや俺の中では別れた女なのだ。このときの蛍がまだ離婚していないとはいえ、離婚した女として見てしまう。だから触るのもためらわれたし、ひどく緊張した。

ゆっくり遠慮がちに額に手を当てた。それでも蛍は起きない。一緒に生活しているところまで無防備になるものなのだなど久々に実感した。紫苑なら、もう起きているだろう。

蛍が起きないことを確認すると、俺は静かに押入れを空けた。そして、蛍がこの後持っていくことになっているパスポートやら預金通帳などの位置を確認した。

もうこのときにはすでに出てこうとしていたのだろうか。現金が随分多めに引き出して

あった。いま後ろにいる蛍はもしかしたらタヌキ寝入りをしているのかもしれないなど  
と、思って後ろを見たが、蛍は寝息を立てていた。

俺はかつて練馬区役所で取ってきた離婚届を引き出しから取り出した。俺の名前が書いてある。実印を取り出すと、判子欄に判を捺した。それを折りたたむと、ルーブリーフを1枚取り、ペンを持った。

“蛍、いままでありがとう。

お前との思い出が俺の人生で最高のものだった。

でもお前はこれから俺を裏切って出て行ってしまおう。

俺はそれを止めない。俺たちは、違いすぎた。

お前に怒る俺も、俺を呪うお前も、どちらも悪い。結局は人間性の違いだ。

子供のことが唯一気がかりだ。

12/19より前に戻って、子供のことをなかつたことにしようかとも考えた。

でも、子供からすればそれは親に殺されるようなもので、恐怖だろう。

せつかくできた子供なのだから、中絶しないで産んであげた方がいい。

いまは実感がないかもしれないけど、生まれたらきっと可愛いものだよ。

俺に今度一切関わらないのも子供を会わせないのも構わない。

お前がしたいようにしなさい。

そのきれいな髪も、俺好みでなく好きに切ってしまいなさい。

俺はお前から返しきれない愛情をもらった。

それが重すぎたかもしれないけど、精一杯の愛情はやっぱり嬉しかった。

失ってそれがよく分かったよ。

一途な愛を返せなくて、ごめん。

ただ、生まれたのを知らない子供を愛せないのは事実だ。

だけど、やっぱり子供のことが気になってしまう俺もいる。

どうやら俺は冷酷になれるほど強い人間じゃなかったようだ。

ひとつ頼みがある。この金を養育費として使ってくれ。

俺が離れ離れの父親としてできる唯一のことだ。

このことは、息子には知らせなくていい。

さようなら、蛍。  
冬に蛍が見れるとは思わなかったよ。  
仄かな……暖かい光だった。  
好きだったよ。”

手紙と離婚届を折りたたむと、蛍の通帳の中に差し込んだ。そして蛍がこの日持っていたコート、そう、買ってあげたばかりのコートのポケットに、俺の通帳とカードと判子、それに換金できるもろもろの書類を入れておいた。合わせると1000万を超える。月5万の養育費を払ったとして、12カ月で60万。俺は18歳のころには働いていたから、18年だと1080万。離婚の慰謝料を入れるとちょうどトントンだろう。

1人の女を買った代金として考えたら滅法高い。ありえないくらい高い。だけど、掛け値なしの愛情をくれた思い出の価値として考えたら、この上なく安い。というか、もはやそれは換金できるものじゃないだろう。どんな富豪でも手に入らないのが掛け値なしの愛だ。

愛して俺を受け入れてくれた女。上辺だけの付き合いじゃない本当の気持ち。心から俺を欲して受け入れて、そして最後には俺を厭って捨てた女。なんて愛おしく、なんて憎らしい。

俺は首を振った。そっと座って、蛍のおなかを撫でた。

「ごめんな、ダメな親父で」

いつぶりだろう……涙が出た。紫苑に流した涙とは違う感情。ああ、そうだ。本当の愛情というものを失った去年のこの日ぶりなんだ。まったく、なんて呪われた日なんだか。

俺はベッドに入ると、右腕で顔を覆いながら、眠りについた。

朝。起きたら、蛍はいなくなっていた。

2006/12/19

慣れた光。俺は右手で目を覆っていた。光が消えると、そこは紫苑の部屋だった。

「……！」目を丸くした紫苑が立っている。

「どうしたの紫苑、そんな驚いた顔で」

「先生……いつの先生ですか？」

「え？……ああ、2月くらいの俺かな」

「じゃあ、向こうに2カ月くらいいたんですか？」

「そういうことになるね」

「……それで」紫苑は不安そうな顔になる「蛍さんとはどうなったんですか？」



「うん……」

紫苑とレインに見守られる中、俺は椅子に腰掛けた。そしてゆっくりと事情を話した。

事情を話し終わると、2人は複雑な顔で俯いた。

「それ……結局蛍さんは裏切ったんですね」

「ああ、起きたらやっぱり出て行ってたよ」

「その手紙があらうと、何も変わらなかったんですか」

「いや、多少は変わったよ。俺は事の顛末を知ってたから蛍を探しもしなかったし、一切連絡もしなかった。蛍としてはあの手紙を見て、俺が怒ってないことが分かったんだと思う。なぜ息子が生まれると知ってたかについては訝ただろうけど、まさか時空移動したなんて思うまいからね。結局蛍は俺が怒ってないことを確認できたし、金ももらえたから、言うことなしということで俺には一切連絡をしてこなかった。俺も一切蛍を探さなかったから、警察沙汰で行方不明人云々という話にもならなかったよ」

「そうですか……でもなんだかそれ、蛍さんばかり得してる気がします」

「そんなことないよ。金があらうと子育ては大変だ。それに一般的な養育費しか渡さなかったから決して潤沢じゃない。女手ひとつで育てるのは大変だよ。あの性格と現在のプロパティじゃ再婚のめども立たないだろう。あの子も、大変なのはこれからだよ」

そう言ったら紫苑は少し納得したらしい。不公平だという顔つきはしなくなった。

「でも……父親の役目ってお金を渡すことだけなんですか？」

「違うと思う。でも、別居してしまえばそれしかできない。それが現実だ」

「そっか……」紫苑は黙って俯いた。

「まあ、円満に終わって何よりだよ」

「そう……ですね。それは確かに」

「なあレイン、蛍とこう円満に解決したのは気持ちをきちんと伝えたからなんだけど、それってお前のおかげなんだよな。ありがとうな。気持ちって言葉にしないと通じないって、改めて思ったよ」

⑥4, -A Jo7al 7oA AchoA7o,, C-I -A lc7ic Cc,, 4-A -A A-ic o>C6

「ああ。レインが俺を助けてくれた。感謝してる」

するとレインはにこりとした。

「レインも気持ちは言葉に出した方がいいよ」

⑥3>...-A Jo7o,, 4-, -A Jo7c6

「うん、そうだな。その方がいい」

「え、レインの気持ちって何のことですか？」

「メルティアを使ってここまで来たわけだろ。地球を去る前にレインが何か想いを伝えたいとしたら、それはどんな想いだ？」

「え……？」

「案外鈍いんだな、紫苑は。もし紫苑がアトラスで去年好きな男ができたとして、アトラ

スを離れる前に何か気持ちを伝えたいとしたら、何を伝える？」

「それは……好意、ですよ。つまり、告白」

「そう。レインだって同じさ。で、問題はそれが誰かということなんだが」

「え？」首を傾げる紫苑「アルシェでしょ、レインが好きなのは」

「アルシェだったらレインがいま地球に来た意味はないだろ」

「そ、そうか……」

「つまり？」

「え……と、静が好きなの？」眉をひそめる紫苑。俺は鼻で笑った。

「それも違う。同じく、ここに来る意味はない。はい、地球でレインが俺以外に会った男といえど？」

「……川越の……喫茶店とかにいた……。あるいは塾の……」

「おいおい、本当に気付かないのかよ。もっと身近にいるだろ。紫苑、お前、勘付きたくないだけじゃないのか？」

すると紫苑は微かに首を傾げたかと思うと、一瞬ハッとして、直後に青ざめた。

「もしかして……」

「そう」

「え、でも……ありえないでしょ。あのお父さんよ？妻子ありだし、年だって……」

「関係ないだろ、そんなの。俺だって女ならきつと惚れてた」

「そんな……」

「それにレインは父親をなくしてるからな。その辺も関係してるんだと思う」

「だけど、私の気持ちはどうなるの？私のお父さんなのに……」

「うん。それでレインはとても苦しんできたと思うんだよ。お前との関係を壊す恐れがあるからな」

①lecΛ, (a eC u-Λδ u-Λ (c l-<zc l-e e -Λδ ⑥

②>.....4-, (e-, -Λ l-<zc lYαJJa...V-ΛC-ΛC, ucαΛ⑥

③e, eJδ eJ θ-θ- e -Λδ ⑥

④l- JcJz- -Λ c> -Λ Jeczc l-> Jθ- JαC Λ-zc Ve> (cΛ)- JeeJ,, l- Λ-lz- -Λ J-Λ,, 4-Λ l- eC V-μ>- , J- )-l (c,, <- )-Λ (c<zcΛ l-e e ΛαJ,, JαΛ...-Λ l-<zc- >- l-⑥

⑤JαΛ, -μeδ ⑥

⑥h3μδ "JαΛ, -μeδ " eJJze (αδ -μ)-J⑥

⑦-lC, (c eJzc (α (αC -μe⑥

⑧4-, lα,, z, -μe,, 4-, -Λ J-Λze l- J- ) ucZ)-⑥

⑨h--Λ...⑥

紫苑は呆然とした様子。そりゃそうだろうな。

⑩JαΛ, (c (αzc l-δ -lC, θ-θ-⑥

⑪l-cZ lKeμ lαθz- -Λ αJczc <cαΛ- -l l- JαΛ -Λ Jαzc,, C-l...C lαθzc (αδ ⑥

③>...レカ、 -レ ヨヲカレ (-レ カ eレ eレカ、 ヨカ...レ>... )eレレ-

④JeeMeレC、 レカ

⑤cc、 h-c...-レ <eMeレ

紫苑はレインの手をきゅっと握った。レインは不安げな顔のまま、微笑んだ。

2009/6/27

「——リディアは？」

「えと……小学生以下は無料みたいです」

財布から千円札を出すと、機械に通す。大人2枚の入場券を買って、園内に入る。

東京都立川市、昭和記念公園。土曜日。俺は紫苑の片手で引いて久々の入口をくぐった。もう片方の手には乳母車。

園内をまっすぐ歩く。左手はこもれびの池。この公園には入口が多いが、俺は一番初めに来たときにぐるっと道路を周った結果、たまたま砂川口から入ったことがあり、それ以降必ずここから入ることが習慣になっている。紫苑と行ったときも同じだったし、今回もそうだ。

秋になると赤いコスモスが咲く一画で右に折れる。少し小高い丘になっている。立川市が一望できる丘だ。芝生が敷かれ、大きな石が置かれている。あのときのままだ。

丘に登ったらなぜかここだけ突然雲ひとつない天気になった。

「あれ……？」

手をかざしながら空を見る。誰か魔法でも使ったかのようだ。

紫苑はビニールシートを広げると、鞆を重りに使った。鞆から弁当を出す。

「先生、お昼にしましょ」

「あのさ、空が……」

「そら？」

……まあ、いいか。

乳母車に近寄った。中には笑顔の赤ん坊がいた。最近ようやく人間らしい顔になってきて、可愛くなってきた。

「ほーら、リディア、おいで」

乳母車に手を伸ばし、娘を抱っこする。きゃっきゃと笑う娘。涎の付いた指を動かして俺の頬にぶついたり口の中に突っ込んできたりする。

「はいはい、良い子良い子な。ほら、リディア。見て、この景色。俺な、子供にこの景色を見せたいって思ってたんだ、ずっと……」

「えおー？」市街に話しかけているらしい娘。

「ようやく見せることができたよ」

じーっと丘の下を見る娘。俺は娘を抱っこしなおす。

「……生まれてきてくれてありがとう」

「ああ、その言葉、嬉しいなあ」と後ろから紫苑が言う。

「そう？」

「うん。言い換えれば、産んでくれてありがとうってことですよね？」

「勿論」と座る。

「私もよ。産ませてくれてありがとう」

人目があるのにも関わらず俺は紫苑の唇にキスをした。

紫苑は「えへ……」と言って顔を赤くした「こんなところ、恥ずかしいよお」

「今日は記念日だし、少し大胆に攻めても大目にみてね」

「ふふ、お昼からそんなはりきって、夜になって疲れたなんて言わないでくださいね。今日はリディアを早く寝かせちゃうから」

紫苑は色っぽく微笑む。俺は「うん……」と詰まった。少しドキドキした。

「しお～ん！」

坂の下からとてとて登ってくる少女。

「レイン、こっちよ。お昼にしましょー」

「h0-, l-Vc >4a ✪ 今日はなあに？」

「サンドイッチよ。はい」

レインは紫苑にサンドイッチをもらうと、ちょこんと座る。

「しおん、リディアにおっぱいあげないと」

「あ、そうね。哺乳瓶に入れてきたから。そこに入ってるわ」

「うん、じゃあ私があげるね」

レインは哺乳瓶を取ってリディアの唇に咥えさせた。俺はじっとレインの手元を見た。

「けど、ほんと助かるよ。こうしてレインがリディアの世話してくれるから紫苑も大学に行けたし、俺も安心して働いてられる」

「えへ」レインは微笑む「リディア、可愛いからね。それに、私は紫苑のお父さんにフラれちゃったし、結婚する気もないから。子供は欲しかったから、こうやってお世話できるだけで幸せよ。愛する私のしおんと大好きなお兄ちゃんの娘だもん。自分の子供のように可愛いわ」

「そうか。いや、ほんと助かるよ。それにしても、お前日本語上手くなったよなあ」

「そうかな、まだ知らない単語がいっぱいあるよ。発音も難しいね。終助詞っていう言葉の使い方が難しいね」

「そこまで到達すりゃ上等だ」と笑う俺。

「ねえ、レイン。お願いがあるんだけど」と紫苑「今日、リディアを家で見てほしいの」

「うん、いいよ。これからどこか行くの？じゃあ白岡まで電車で帰る方法を教えてね」

俺は紫苑の家に婿として迎えられた。いまは白岡に住んでいる。レインも同居人だ。

なぜレインがここにいるのかって？俺がタイムスリップから戻ってきた後、レインは紫苑のお父さんに自分の気持ちを伝えにいった。そして見事に玉砕し、泣きはらした顔で帰ってきた。お父さんはとても紳士的に断ったそうだが、女の子の気持ちとしては泣かなければ気が済まないようだった。

レインは急に弱気になり、紫苑や俺と離れたくないと言い出した。泣き止まないレインを不憫に思ったメルティアは、ディアセルの1日だけという条件を曲げ、行きたいときにいつでも往来ができるようにしてくれた。

メルティアは紫苑がかつてレインに贈った「紫苑の書」を中空から取り出すと、魔法をかけて、その本をアトラスと地球を繋ぐ道にした。本を開けば異世界へ行けるという仕組みだ。これのおかげで俺たちはいつでも互いに行き来することができるようになった。

レインは大学の合間にちょこちょこ遊びに来ていた。紫苑の妊娠が発覚すると、子供を育てる紫苑は大学に進学できないという話になった。するとレインは「子供は私が育てる」と言い出した。そして大学を通信講座に切り替え、地球に住み込んでしまった。

驚くべきことに、レインはアンスを利用した通信講座だけで首席を取り続けた。その上、紫苑が出産をすると、娘リディアの世話を甲斐甲斐しくみてくれた。ルフェル神に日本語を解禁されたおかげで、日本語を話すことにためらいもなくなったようで、日本語の能力もたちどころに上っていった。

なお、レインが育てるということが決まった段階で、俺の婿入りが決定した。練馬には俺の親がいるが、レインのことを説明できそうにもないからだ。

それと同時に、お父さんとお母さんは近くに新しい家を買って出て行ってしまった。6人ではあまりに手狭だからという。まるで俺が追い出してしまったようで気が引けたが、お母さんは笑って「ちょうど娘離れして料理も自分で作らなきゃねえと思ってたころなのよ」と言っていた。

実際、家はすぐそこなので、2人はよく遊びに来てくれる。最も尊敬する男であるお父さんとプライベートで会えるのは俺にとっても楽しみなことだ。

教師はシェルテスの一件で辞めてしまったが、新しい仕事はお父さんが斡旋してくれた。外資系の大きな会社で、始めは驚いたもんだ。お父さんの心配りのおかげで楽なポストに就けてもらえた。仕事はきついが、早く帰れるので毎晩紫苑の手料理が食べられる。そして愛するリディアに毎晩会うことができる。これが何よりの幸せだ。

まあ、しいて言うなら家の中が女ばかりで、男は俺しかいないから若干肩身が狭いというのが難点だ。トイレの便座を上げれば怒られるし、風呂上りに脱衣所を塗らそうものなら後が怖い。妙齢のご婦人ばかりだから、家の中でだらしない格好もできない。

それにしても、若い女ばかりで構成されているからか、家の中がやたらといい匂いがする。芳香剤が歩いているようなもんだな。鼻のいい俺にとっては非常に快適な家だ。

「早いなあ」

紫苑が呟く。

「何が？」

「妊娠が分かったのが 2007 年の 1 月 20 日でしょ。1 月末に静のお母さんたちにご挨拶にいったでしょ。大学の合格が決まったのが 2 月。3 月 6 日の火曜日に籍を入れて、私は水月紫苑になって。そしてそのすぐ後でしたね、12 日にお父様が亡くなって……」

「ああ、親父か……。うん、安心したんだろうな。再婚と子供のことで」

「そうね。あのときは大変でしたけど、結局予定通り 17 日の土曜日には椿山荘で結婚式を挙げて……」

「ああ、あのドレスは綺麗だったな」

「えへ……。そのあと先生がウチに来て。私は 4 月に入学して……。7 月のディアセルにはアルシェと会って」

「驚いてたよな、あいつ。紫苑のお腹が大きくてさ」

「アルシェは私が妊娠してたこと知りませんでしたもんね。あの祝福ぶりったらなかったわ」

「あれは凄かったな……。でもそれ以上なのはレインだろ。あのときからもう母親みたいな態度だったもんね」

「ふふ。で、7 月にもう動けないかなあなんて思ってたら夏休みになって。で、8 月にこの子が生まれて。夏休みは産前産後の回復に使えたから単位にも響かなかったし。ほーんとリディア、あなたって母親思いよね」

紫苑が頬をふにぶにする。

「産まれてわりとすぐ届けを出したよな」

頷く紫苑。どちらでも良かったので妊娠中に子供の性別は調べなかった。分娩には立ち会った。生まれてきたのは娘だった。現代医学でも男女の区別は性器の有無で行う原始的な方法だ。俺は一生懸命ついてるかどうか探して凝視したんだけど、どうもこの子は母親と同じで貞操観念が強いようで、薄紫のへその緒でうまく女の子の部分の部分を隠していた。俺はお尻のほうから見上げて娘だということを確認した。正直、意外だった。でもきっと息子が産まれても意外とか言ってたんだろうな。

紫苑の出産は非常に楽だった。陣痛も短く、ころっと産んでしまった。親思いの娘だ。かなりグロテスクな状態で産まれてきた。俺には 2 人目の子供だが、産まれたのを見るのは初めてだった。こんなグロテスクな人間ぽくない生き物なのかと驚いたもんだ。でも、そんなことより嬉しくて嬉しくて仕方なかった。

俺は親父が嫌いだったが、昔からひとつ印象的な言葉があった。俺が生まれたとき、母さんの手を取って泣きながらありがとうと言ったそうさ。その言葉がずっと頭に残ってた。それを自分もしてあげたいと思っていた。虫にはしてやれなかったな……。

紫苑はあまり苦しげもなく産んでしまったが、流石に憔悴していた。俺は紫苑の手を取って、自然と泣いていた。自然と「ありがとう」という言葉が出てきた。親父がやったこ

とと同じことをやろうという気持ちはもうすでに忘れていた。心の底から自然と出てきた言葉だった。紫苑は「あなたの子よ」と言ってにこりと微笑んだ。その言葉が凄く嬉しかった。

紫苑に名前を決めてといわれ、考えた。そういうのは紫苑がしたいものだと思っていた。俺は色々考えた。日本語名も勿論考えたけど、どうもしっくりこなかった。

そもそも受精卵の成長からして紫苑の排卵は正常に起こっていたようで、センターでつわりが起きたのは実際に 9 週ごろだった。後から細かく計算したのだが、どうも一番初めするとき、つまり紫苑の処女を奪ったあの子供らしい。あの後排卵して受精したらしい。それがこの子だ。紫苑の処女をもらったあと、暫くは抱かなかったので、どうも初めてのときの子供だという計算になる。

紫苑の処女をもらった経緯は「シェルテス戦で死んでしまうかもしれないからしておきたい」というものだった。つまり、アトラスの存在がこの子を作ったことになる。そこで俺はこの子にアルカ名を与えることにした。

だが「レイン」など同居人と同じ名前だとややこしい。そこで色々考えた結果、俺はリディアという名前を選んだ。というのも、俺がシェルテスとの最終決戦で紫苑にプロポーズしたとき、紫苑の様子はリディア=ルティアそっくりだったからだ。魔輪アルマディオを嵌め、魔杖ヴァルデを掲げ、テルテの羽衣を纏い、リディア=ルティアの手記である玲音の書を持っていた紫苑。彼女はリディア=ルティアに助けられたようなものだ。それでその名前をあやかって付けたわけだ。

俺の独断で、役所に届けるまで名前を秘密にしていた。名前を明らかにしたとき、ウチの親は不思議な名前だと言って訝っていたが、紫苑の家は事情を理解していたので良い名前だと言ってくれた。そして紫苑自身も気に入ってくれた。何より面白かったのが、紫苑は俺が名前を報告したときに、既に何か書いて折りたたんであった紙を目の前に出した。その紙を開くと、中にはリディアという名が書いてあったのだ。どうやら同じことを考えていたらしい。名前はカタカナにした。アルファベットでアルカを転写する方法もありえるが、「水月 ridia」ではおかしい気がする。そこで「水月リディア」となったわけだ。

そのときケータイが鳴った。お父さんだ。紫苑が立川の景色を見やる。無表情だ。

「はい」

リディアが「あー」と不安そうな顔をする。電話が鳴ると俺がいなくなってしまうということがインプットされてるようだ。リディアにとって俺のケータイは敵らしい。

「はい……え、確か月末でご納得いただいているはずですが。……ええ……ああ、先方の」

俺は横を向いて紫苑に「ごめん」と手を上げる。ケータイで話す俺を尻目に、紫苑は少し寂しそうな顔で佇んでいた。話が終わり、電話を切る。

「お仕事なの、先生？」

そういえば紫苑はあいかわらず俺のことを先生と呼ぶ。いつになったら俺の生徒を辞め

るのだろう。

「うん、問題が起こっちゃったみたいで。ごめん」

「謝ることじゃないよ。先生が働いてくれてるおかげで、私とアルシェとリディアはご飯を食べていけるんだから。あーあ、私が先生の仕事、手伝ってあげられたらなあ」

「いいんだよ、紫苑はそのままで。そりゃ紫苑が仕事すれば即戦力だとは思うけど、今は子育てが一番の貢献だよ」

「ふふ、そうね」

「さて、行かないとな。紫苑は免許ないから、俺だけ電車ってわけにいかないな」

「じゃあレインと電車で帰ってるわ。でも、今日は早めに帰ってきてくださいね。今夜ね、行きたいところがあるんです」

「いいよ、どこ？」

「先生の大学の池……」ぽつりとつぶやく紫苑。

「なんでまた」

「べっこの髪飾り……」

髪をかき分ける紫苑。長い黒髪が緑の滝となって流れ落ちる。

「買って……ほしいな。池で挿してほしいんです」

俺は複雑な笑みを浮かべた。久々に胸痛がする。

「その後、場所を変えましょ。私、朱塗りの橋の上であなたにこう聞くんだ」

「うん？」

「ほたる、みれた？……って」

2022/7/20

埼玉県南埼玉郡白岡町新白岡の一軒屋。

私、水月リディアは居間の椅子に腰掛けていた。とても暑い夏の日。世間から見ればきつとなんでもない水曜日。でも、私には今日が大切な日なのだ。

私は母である水月紫苑と父である水月静との間に生まれた一人娘だ。そして異世界アトラスから来たレイン＝ユティアに育てられた少女でもある。

今は中学3年生。14歳だ。8月生まれだから、あともう少しで15になる。アルバザードでは14歳の最後の日までが子供という扱いだから、もう少しで半大人になれる。そう思うと、なんかどきどきする。

学校は東京の女子校だ。紫苑——ウチはアルバザードかぶれなので、親を名前で呼ぶことが多い——の薦めで、近所の学校には入らなかった。紫苑はあまり近所の学校にいい思い出がないみたい。

ただ、共学にしなかったのは静の薦めだ。私にカレシができるのを嫌がってるみたい。



そんなことしなくても平気なのに。私、男の子って苦手だし。まあ、そもそも人が苦手なんだけど。特に男の子は苦手。よく知らないし。男の人って静くらいしか知らないから、特にそう思う。

それと、私の理想は静みたいな人。いつも言っている。「静と結婚したいのよ」って。静は嬉しそうにはするけど、取り合ってはくれない。そりゃそうだよね、娘だもん。静は私のことが世界の何よりも大切に可愛いみたいだけど、何よりも好きなのは紫苑みたい。

学校で話を聞いていると——あくまで盗み聞き。友達、いないからね——だいたいクラスの子はお父さんが嫌いみたい。でも、私は好き。ヘンなのって思われそうだけど、しょうがないじゃない、好きなんだから。

小学校までは本当に結婚したいって思ってた。でも、紫苑のことも好きだから、引き裂くようなことをしたくなくて、葛藤に苦しんでた。中学になって自分は法律の上だけでなく、社会的にも倫理的にも、そして何より静の気持ちの上でもお嫁さんになれないんだって理解した。悲しかったけど、理解した。

ネットで調べると、娘が父親と結婚するのはとても多くの問題があるみたいで、それを読んでいたら怖くなった。だから、自分が静との結婚を諦めたのはいいことだと思う。

それでも私の静ラブ度はうず高いわけで、娘のくせして世話女房化している自分ときおりうんざりすることがある。まあ、静は娘に好かれてご満悦という感じだけど、私との温度差は大きいみたい。

あれは一昨年だったかな、初めて生理が来て、静に報告してみた。静は複雑そうな顔で祝福してくれた。なんのけなしに「じゃあ、これでお父さんの子供を産めるのねえ」と言ったら途端に静は押し黙ってしまった。その後、静にしては珍しく風邪を引いて、4日間も会社を休んでしまった。

別に私の言葉に性的な意味はないんだけど、よほどショックだったのだろうと反省し、それからそういうことは言わないようにしている。ちなみに、私のせいで静が風邪を引いたと紫苑に珍しく怒られ、ちょっとふてくされた覚えがある。

ウチの相関図というのは分かりやすいもので、静→紫苑、紫苑→静、私→静、レイン→紫苑というものに習合できる。それぞれ一番大切な人が誰であるか分かりやすい。

さて、私はそんな家庭に生まれて過ごしてきたわけですが、今日は特別な日ということで、こうして居間でぶらーんと脚を伸ばしながらアイスを食べつつ、だらだらしてるわけです。暑いにゃあ。

そんなことを考えていたら、レインが入ってきた。猫みたいな人だ。

そういえばウチで飼ってる本物の猫は今日は姿を見せないな。ぽぷりという猫で、私が小さいときに静が連れて帰ってきたのが出会いだ。雨に濡れて震えてたんだそう。あのときは子猫だったのに、いまや単なるぐーたら猫だ。

「おかあさ〜ん、アイス食べりゅ？」

はもはもしながら喋る私。ちょっとはしたなくて、いや。

「あ、ほしいほしい」とレインは冷凍庫を開けに行く。

私はなぜかレインをお母さんと呼ぶ。紫苑によると、レインが私を病院に連れてったときに、看護婦さんがレインをお母さんと勘違いしたことから、だんだんとそう呼ぶようになっていったみたい。よく分からないけど。

レインがアイスを咥えながら座る。しかし、若いなあ。いつまでも可愛くてきれい。

「ねえお母さん、私がe>cVになったら働くの？」

「どうかなあ。日本で働くのは難しいよ。免許もないし、保険証もないし」

「そうだよね……」

「アルバイトで働いて夜はこっちに帰ってくるっていうのもできるけど」

「家にずっといたら気が塞がっちゃうから、それでもいいんじゃない？ c c u>c c c c c a  
δ」

⑥>>, -Λ し->>c c c c l -Λ Λ->e Λ-l 7- μ- c a ⑥

⑥-(c-, h-c c c l c Λ>-h >- -Λ c> -Λ c c >- e>cV,, 7el7 c a, -Λ c c l c s eΛ c c c h c c>-< -Λ  
μ-し 7-<⑥

⑥4-, し-> し->⑥頷くレイン。

私は「うん」と言うと席を立った。

自分の部屋に戻ると、パソコンのスイッチを入れた。

インターネットに接続する。お気に入りからサイトを選ぶ。

## 「新生人工言語論」

もうずいぶん長いサイトだ。管理人は私。もう14年になる。元々は紫苑が始めたサイトで、それを私が引き継いだのだ。

これは人工言語やアルカを紹介するサイトだ。紫苑曰く、私が生まれたころは人工言語についてノウハウを述べたサイトがなかったそうだ。

紫苑は自分のアトラスでの経験を活かし、アルカだけでなく人工言語についても何か語れないかと考えたらしい。それでサイトを作ってみたところ、案外これが盛況だったという。

紫苑のサイト運営は巧かったようで、当時は存在しなかったか矮小だった人工言語界が少し賑わったそうだ。紫苑は異世界で実用されている人工言語アルカを、アトラスについてはうまく隠しつつ、紹介した。

なにせ異世界で実用されている言語だけに、反響はそれなりのものだったらしい。レインの助けもあって、当時の人工言語の中ではハイレベルのコンテンツ力を持ったサイトになったそうだ。

その完成度の高さから、アルカはほかの人工言語の見本になったり、あるいは叩き台になったりした。同時に、コンテンツメーカーの目にも留まった。紫苑はその言語能力の高さからコンテンツメーカーと協力し、人工言語作成の受注を行ったりしたそうだ。

コンテンツメーカーが作るコンテンツを通し、徐々に日本で人工言語という概念が広まり、人工言語と言えばエスペラントという公式を崩すに至った。

そんな中、私がサイト運営を引き継いだ。趣味でやっているものだから大きな活動ではない。でも、ネット上の友人と話すのは楽しい。私は引っ込み思案なところがあるから、現実よりネットの方が仲良くなれるみたい。レインが育ててくれなくて1人だったら、もっと暗い子になってたんだろうなあ。いまでも十分暗いって言われるのに……。

巡回経路のサイトをチェックすると、パソコンをシャットダウンした。

机の引き出しを開けて、紫苑の書を取り出した。額にぐっと表紙を押し当てる。少し涼しい。

「むー」

私はつい先日の出来事を思い出していた。最近、そのことばかりが気になる。

静には紫苑の前に奥さんがいた。蛍という人だそうだ。学生結婚だったらしい。離婚してから生徒だった紫苑と結婚したそうだ。どちらも小説みたいな話だなあ。

で、その蛍さんとの間に蛍太という息子がいるそうだ。だけど、静は会ったことがないみたい。会いたくないのかって聞いたけど、いつも困ったような顔をするばかり。大人って複雑なんだね。

でも、私からしてみれば、蛍太君は腹違いのお兄ちゃんだから、やっぱり気になるわけ。蛍太君のことは小さいときから聞かされてきたけど、実際会ったこともないし、どんな人なんだろうって思った。

私は引っ込み思案だから、お兄ちゃんといえど、自分から会いに行くのは怖い。それに、そもそも私は蛍太君がどこにいるのか知らない。だから、子供のころからお小遣いを貯めて、ネット経由で探偵に依頼して調べてもらった。

そしてついにこないだ、蛍太君に会いにいったのだ。しかも2回。ただし、1回目は本人確認をしにいっただけ。顔も知らないから、学校から帰ってくるのをじっと待った。該当者っぽい男の子を見たとき、あれがお兄ちゃんなんだとちょっと意外に思った。なんか、静に似てるんですけど……。

でも、静の方がずっと強そうな感じ。蛍太君は高校1年で、私より1つ上。背はふつうくらいで、痩せ型。なで肩で弱そうな感じ。メガネをかけていて、黒い学生服を着てた。全体的になよとした静みたいな感じだった。

そのときはそこで帰った。2回目は私、勇気を出して話しかけてみた。学校の帰りに1人で歩いているのを見計らって、後ろから「蛍太君？」と声をかけてみた。私にしては最大

級の勇気だった。

彼はハッと振り向くと、私を見て、誰だこいつという顔をしたかと思うと身を引いて、目を細めた。なんだろう、女の子相手に少し怖がってるような感じがした。

「……だれ？」

その短い言葉がお兄ちゃんの最初の言葉。すっごくぶっきらぼうでビックリした。怒ってるのかと思った。名前呼んだくらいで怒られてたらかなわないよ……。

「私、あなたの妹よ。リディアっていうの。蛍さんから聞いてない？」

「……だれ？」

蛍太君は怪訝そうな声で同じことを言った。なんだろう、蛍太君って静から聞かされてきた蛍さんの性格にそっくりな気がする。ああ、やっぱりこう育ったのねと思った。

「知らないんだ。あなたのお父さんが再婚してたこと。私、年子よ。中3。……ほんとに何も知らないの？」

「……」

そしたら今度は沈黙。しばらく沈黙。身を引いて、怖がった猫のようなお兄ちゃん。でも、逃げるわけでもなし、かといって愛想を見せるわけでもなし。ヘンな人……。付き合いづらいなあ。

「んと……何だか私、色々期待しすぎちゃってたみたい。お兄ちゃんって優しいのかなとか、私の存在を知ってて私と同じく会いたがってくれてるのかなとか、正体を明かせば会いたかったよって優しく言ってくれるのかなとか……勝手に期待してました。心の中で妹ってどんなだろうってずっと考えてくれてるんじゃないかって、一方的に期待してました。でも……私の想いはちっとも伝わってなかったみたいね。そりゃそうだよね、言わなきゃ伝わらないよね」

私はぺこっとお辞儀をした。

「静から聞いてる。あなたみたいな人は、そうやって何も反応を返さないでも、きちんと心に言葉は届いてるんだって。それ、理解できるよ。ただ、私は静に似て聡い性格だけど。まあ、お互いインナーなのは同じみたいだね。その辺は波長が合うみたい。大人しい私がこんなに喋れたなんて数えるくらいしかないもん」

「……」

「えと……それじゃ帰るね。蛍太君、私はあなたを見限ってこの場を去るよ。さようなら、お兄ちゃん。勝手に色々期待してごめんなさい。期待は儂いね」

もう一度ぺこっとお辞儀をすると、私は小走りでその場を去った。蛍太君は何も言わなかった。

——そんな一日だった。

そして私はその日のことをよく思い出す。いまも、考えている。すごく残念だった。もっと優しいお兄ちゃんを期待してた。私に会いたがってくれていて、会えば歓迎してくれ

るんじゃないかって期待してた。でも、何も知らなかったのね。それじゃあしょうがない。うん、しょうがない。でも……さみしかったな……。

私はぬるくなった紫苑の書を額から外した。

もう一度ネットをつける。今日はディアセル。特別な日だ。更新は早めに終わらせないと。

いま、私は『リディアの書』という本を書いている。静に習って本の作り方を学んだ。これはアルカを一般の人が理解しやすいように書かれた教科書だ。同じようなものはすでに何冊もあるんだけど、自分で作るのは初めて。

静が作ったバージョンや紫苑が作ったバージョン、あるいはネット上の知り合いが作ったバージョンやレインが作ったバージョンを統合して、私なりのものを作るつもり。みんなの作ったいいところを足していきたいと思ってる。

きっと私ならいいものが作れるよと静が言ってくれた。だからがんばる。私は世界に1人しかいないアルカと日本語のネイティブなんだから、きっと私にしかできないことがある。それが何か分かるまで、日一日と作業を進めていこう。

「リディア～、2人とも帰ってきたよ」

下からレインの声がする。私はとてとて走って階段を下りた。

「おかえり」

「ただいま」と2人の声が揃う。

「珍しいね、2人一緒なんて」

「うん、パート帰りに先生が迎えに来てくれたから」

紫苑は静のことを先生と呼ぶときがある。ずっと前に教師は辞めたのに、いまだに先生と呼んでる。癖になってるみたい。

「夜道に紫苑を1人にさせられないからな」と言いながら靴を脱いで上がる静。

私が「んー♪」とにこにこしながら小首を持ち上げると、静は「はいはい」と言いながら髪を撫でてくれた。いつもの挨拶。

「リディア、お前今日は家にいたの？」

「うん、教科書とか書いてた」

「肩凝るぞ、あんまりやると」

「凝ったら揉んでね」といって腕にまとわりつく。

「可愛い娘の頼みなら断れないなあ……」などとぼやきながら静は私の腕を外しつつ、洗面所に行った。

「私も揉んでほしいんだけどな」と紫苑。

「じゃあ紫苑のは私がやってあげるよ」

「リディア、手ちっちゃいからなあ」とくすくす笑う紫苑。

「もう……。h-c, -ΛJc ΛcΛzε l-ve 7- -μΛ- JeCeδ」

Ⓔ4-, >-Λ lc-Jel,, C-l J- Ca, -ΛJc -7Czε -μe/h-cΛ l4aJcεε

Ⓔ3ε, JcΛ ε7 lεδ ε

Ⓔ4-ε

Ⓔh0-, -Λe ε ε ε

うきうきする。

Ⓔ3Λδ CcJc Λcε7εCJ Cεεと静が寄ってくる。

ⒺΛee, CcJc lε, CcZ cCzεε V-μZcΛ,, JcΛ 7eCC-ε

レインの呼び声にみんな2階へ向かう。

「あ、私、セリアに着替えるよ」

「あらそう、じゃあ先行ってるから早く来なさいね」

「はあ〜い」

私は部屋でセリアに着替えた。レインが作ってくれたもので、夏には涼しくて最高だ。

紫苑の部屋に行くと、もう誰もいなかった。部屋の真ん中には一冊のノート。すべてはここから始まったという紫苑の書。

私は部屋をぐるっと見回した。紫苑の部屋……。私の部屋は紫苑のお父さんたちがいた部屋だ。ここはずっと紫苑の部屋だったそうだ。

あのベッドは私が生まれる前からあったらしい。目の前の窓から見える景色は随分変わったそうだ。押入れには紫苑の空手道具が入っていたそうだ。いまだに紫苑は強いみたい。

紫苑は私に護身術を教えようとしたけど、私は親から運動神経を受け継がなかったみたいで、体育はからっきしダメ。走って転んで乳歯を折ったこともあるくらい運動が苦手な私。空手なんてやらされたけど、足上げたら転んで頭打って泣いておしまい。

そういえば乳歯が折れたとき、静は気が狂ったみたいに心配してたなあ。私は心配させたことが申し訳なくて、余計に悲しくなって泣いてしまったのよね。

床の上の紫苑の書を手取る。

さて、まだまだお子様な私。これからどんな未来が待っているのかしら。

きっと、素敵な未来が私を待ってる。

紫苑がやったような冒険活劇が、私にも訪れるのかな。

そうして紫苑と同じくレインみたいな親友を見つけるのかな。

静みたいなご主人様を見つけ、子供が生まれるのかな。

素敵な未来。満足な現在。私、生まれてきて良かった。

私は紫苑の書を開いた。慣れた光が私の身を包む。

きつこの本の中には、私のために書かれたストーリーがある。  
それは、私だけの物語。困難もあるだろうけど、私、諦めない。  
だって、逃げたら幸せにはなれないもの。

紫苑たちと同じように幸せな未来が私にも訪れますように。  
夢っていう色で私のパレットを塗り尽くせますように。

-A loMoc -I (c, lcN) e -A<sup>o</sup>

迎えにきてね、私の悪魔さま♪

——終